

1章16節～32節

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち似た物と代えてしまいました。それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうして情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。また、彼らが神を知ろうとしないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。

1. 絵に描いたような福音の物語

金曜日から土曜日にかけて、クリスチャンキャンプ場・日光オリーブの里の聖会メッセージをいたしました。この集会所には温泉付きの宿泊施設があります。ムラサキスポーツの会長である金山良雄氏をご自分の資金でこの施設を購入し、新しい建物を建てました。日本の教会と、クリスチャンを励ましたいという趣旨で、月一度の聖会を開いておられ、私もそこでメッセージをさせていただいています。

私のメッセージの前に、ミャンマーのクップさんという男性が立ち上がってお話をしました。ミャンマーにはたくさんの部族があって、それぞれ全く違うことばを話しており、お互い理解できないそうです。彼の部族は最も貧しく、今日でも月給が3000円ほど。10人兄弟の9番目ですが、彼だけが高校を卒業しました。お兄さんたちが協力して教育費を出してくれたのです。今、彼らが結婚し、甥と姪が40名いるので、彼らを高校に行かせるために、クップさんが日本に出稼ぎに来たというわけです。

ミャンマーのパスポート代として収入の1/10をミャンマー政府に払わなければなりません。東京の韓国レストランなどで働いても、時給800円、1000円、最高1200円くらいです。その収入の半分を仕送りするのですが、1ヶ月に5万円送れば、10人が高校に行ける。そういうわけで、彼はせつせと働いて、お兄さん達に恩返しをしていたのです。

十数年前のこと、朝5時にドアをノックする人がいて、戸を開けたら移民局の人がいて、「パスポートを見せてください。8年切れていますね。そろそろお国に帰ってもよいではありませんか」と、連行された。待っているのは、間違いなく強制送還です。

以前は、このような労働者が必要で、多くの外国人がいました。代々木公園など、イラン人が何千人も集まっていて、私たちの教会の英語部も、ナイジェリア人をはじめ、アフリカの人がたくさん来ていました。しかし、今、それらの人は見かけなくなりました。日本にいても、もはや仕事がないので不法滞在者は強制送還されたのです。

クップさんは移民局に留置されていましたが、ある日、「クップ、来い」と言われ、行ってみると、「滞在ビザが出た。日本にいてよろしい」と言われたのです。初めてのケースだそうです。法務局が直接、移民局に連絡してきて、「彼にビザを与えなさい」と言って、ビザがもらえるようになった。どうしてかというところ、金山会長が、「この人はよい人で、日本に必要で、クリスチャンでよい影響を与えているから、どうか、彼に滞在ビザを与えてください」という内容の嘆願書を書き、ムラサキスポーツの社員 2000 人や、多くのクリスチャン、J T J 神学校の学生たち、教会から署名を集め、一流の弁護士を雇い、国会議員に働きかけて、こういう結果になったのです。

強制送還されるはずの男が、突然、「日本にとどまってい」と言われました。彼は、その後、J T J の神学校を卒業し、それからバプテストの神学校も卒業して、今は牧会伝道者になっているのです。

この物語を聞きながら、何か、福音を絵に描いたような物語だと思いました。

イエス様が伝道を始める前に、ナザレの故郷に帰って、会堂で宣言をします。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために」。

クップさんは、捕われ人でしたが、自由にされたのです。

福音というのは、非常に具体的に描くなら、今まで歩けなかった人が、歩けるようになった。今まで目の見えないような人が、見えるようになった。捕われていた人、つながれていた人が赦され、解放されたら、それは福音です。何のいさおしもない。善行を積んだわけではない。特別に功績を残したわけではない。弁解の余地がない男に、突然、「お前は日本に滞在することができる」と、一方的な恵みによって釈放される。金山会長の働きによって解放されたのです。本当に福音的な物語だと感動しました。

2. 異邦人の罪

ローマ人への手紙は、パウロの手紙の中でも最も特徴のあるものです。非常に教理的、神学的、組織的、体系的、第一番目の組織神学書と言ってもよいと思います。その上、これは法律的であるといえます。教会では、律法的ということばが使われますが、そういう意味ではなく、法律的なのです。アメリカでは大学を卒業してから、ロー・スクール（法学院）に入ります。法学院ではローマ人への手紙を研究するクラスがあります。宗教として研究するのではなく、法廷における弁論のモデルとして学ぶのです。ですから、ローマ人への手紙は、皆さんが法廷で裁判を見ているという前提で書かれているわけです。

アメリカでは、国民全員が裁判員になる責任があり、私も二年に一度、裁判員として出頭しました。日本でも裁判員制がはじまり、これから裁判員になるかもしれませんね。裁判員として、この被告人には罪があるか、ないか、有罪か、無罪か判断を下す場面を想定しながら、ローマ人への手紙を読んできたいのです。パウロはみずからを検事として訴えており、ここでの被告は異邦人、すなわち、宗教を持たない人、あるいは唯一まことの神を信じない人です。

パウロは、異邦人というのは、不義を持って真理をはばんでいると言います。だから、神の怒りが下って当然である。彼らには有罪であり、さばかれるべきである。そして検事としてのパウロは極刑、死罪を求めているのです。

3・第一に、被造物を見れば、神は明らかに知りえる。

異邦人が有罪であることの第一番目の理由は、神について知りうることは、明らかであるからです。異邦人にとっても、天地を創造した唯一まことの神を知ることは難しくありません。なぜなら、神がご自分を明らかに啓示されているから。神の目に見えない本性、神が目に見えない存在であること、神が永遠であること、力を持っておられること、天地の創造主であることは、神が創造された自然界を見るならば、はっきり知ることができる。それにもかかわらず、異邦人は神を拒んでいるのだから、有罪だということです。

私がまだ22～23歳の頃、ハワイに行きました。飛行機の中で友達になった中国系ハワイ人が、自分の家に滞在するように招いてくれました。家族全員が音楽をする魅力的な人たちでした。彼らは旅行者があまり行かない小さな湾に連れて行ってくれました。海面にスノーケルを出して空気を吸いながら、熱帯魚にからだをぶつけるようにして泳いだのです。目の前に大きな魚が泳いでいて、手を伸ばせばさわられるような感じでした。その熱帯魚のデザインの面白さ、カラフルな美しさ。神様は、何というすばらしい方だろうか。まことに美しい色、デザインをもって、これらのものを創造された。その神様の美的感覚に感動しました。そしてビーチに帰ってくると、たくさんの貝殻がありました。掌ほどの大きな貝殻、また米粒のような小さな貝殻にもまことに美しいデザインが施されている。こんな小さな貝殻にすら、神様はこんなに心を配り、美しいデザインをされているのかと思って、神様をほめたたえたのです。

日本人としてノーベル賞受賞第一号の野口英世さんは、「タンポポ一つを見れば、神様の愛と力を知ることができる」と言いました。また天体を観察したアインシュタインは、「この宇宙は、神によって造られたと言うほかはない。そう結論せざるを得ないのだ。私の物理学は、神はこれ以外の方法でいのちを生み出すことはなかった。これは唯一の道であり、いくつかの方法の一つではない。これしかなかったのだということをとどめているのである」と言いました。

もし私たちが、素直な正直な心をもって、タンポポでも、実のなる木でも、或は人体の器官、たとえば目を研究するなら、神が、知恵と愛をもって、すばらしいからだを造ったと言わざるを得ないのです。

背が小さいとか、大きいとか、太っているとか、やせていることを気にしますが、ほんの少しの違いです。目をとっても、耳をとっても、口をとっても、どこを見ても、このからだはすばらしい。神様の最高傑作です。

心を開いて被造物を見るならば、神様がそれらをお造りになったことがわかるのです。

University of Nations という大学の助教授でダニエル・キカワ博士が「神が日本に残した指紋」というDVDをつくりました。もし、唯一まことの神がこの世界を創造し、ご自分を被造物において明らかにされておるなら、恐らく、どの文化でも唯一の神を礼拝した足跡があるはずだという仮説を立てました。彼は日系アメリカ人でしたから、特にアジアの国々、インドネシア、フィリピン、中国、日本、インドのような、偶像に満ちた文化の中であっても、最も古い神様の名前を見出すなら、それは唯一の造り主の神様を指すに違いないということを信じて、調査をしてきました。それは、日本にもあった。その名前は、天之御中主神、天主ということですね。この名の神を偶像にした形跡はありません。

私は彼の説に賛成するほど調査していませんが、そのような研究をしている人がおり、学説があるということを紹介しておきます。

しかし、それは当然であろうと思います。なぜなら、神の目に見えない本性、永遠の力と神性は、被造物によって知られ、はっきり認められるのですから、それを発見した人がいたとしてもおかしくありません。

しかし、「**神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなった。**」真理をはばむと、その心は暗くなっていきます。自分は知者であると言いながら、愚かな者となった。ダビデは、「愚か者は心の中で、『神はいない』と言っている」（詩篇 14・1）と言いました。「神がない」と言うなんて、あまりにも愚かだ。この自然の世界を見れば、神のすばらしさがどこにでも溢れているのではないか。どうして、神がないなどと言えるのか。

4・第二に、不滅の神の御栄えを偶像に代えてしまったから。

異邦人が有罪である事の第2の理由は、不滅の神の御栄えを滅びゆく人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似たものと代えてしまったからです。「代える」というのは、神を知ろうと思えば知る事ができる証拠です。

ある国で買い物をする時、「これはグッチのお財布で、本物です。1万円です」と言います。グッチの財布は10万円もするので、それは偽物です。だから本物と言うのは、「これは本物の偽物です」という意味なのです。一番初めにつくられた偽物で、最高級の偽物だという意味で、「本物」と言っているのです。面白いですね。でも、グッチの偽物があるということは、どういう意味でしょう。それは、グッチの本物があるという証拠です。

偶像に代えてしまい、偽物を持っているということは、実を言うと、本物の神があるということなのです。25節「それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られたものを拝み、これに仕えた」。この1節の中に、「偽物」、「代えた」、「代わりに」と、代えるということばが、3回出てきます。「代える」ことが偶像礼拝なのです。

それにしても、全世界に偶像礼拝があふれています。パウロがアテネに行った時、おびただしい偶像があったので、彼は怒りを持ったと書いてあります。エジプトに行けば、そこにはたくさんの偶像があつて、太陽を拝むかと思えば、ふんころがしのような虫も、犬や蛇なども、神として拝んでいました。私の義母は松山の「エデンの園」という老人施設にお世話になっていますが、その施設の隣に立派な四角い石が据えられていて、その上にとぐろを巻いた蛇の像が置いてあつた。聞いてみると、松山においては、人々は蛇を拝むのだというのです。ある所では、きつねを拝み、ある所では、タヌキを、ある所では鳥を拝んでいます。

しかし、牛が拝まれることが圧倒的に多いようです。モーセが山からなかなか降りてこないで、イスラエルの民がアロンに「私達に神を造ってください」と言うと、彼がつくったのは金の子牛でした。イスラエル（北王国）は、ヤロブアムという最初の王様から、ベテルとダンという所に金の子牛を置いて民に礼拝させていました。ギリシヤ神話では、大神様ゼウスは、たびたび牛の形になって、若い女性を誘惑すると、女性がひっかかってしまいます。

牛は、威風堂々として、威厳がある。インドでは聖牛と呼ばれ、牛が歩いていけば、人も、自動車も、電車も道を譲らなければいけない。牛肉を食べるなど、絶対に赦されない。日本でも、明治になるまでは牛を食べてはいけなかった。そのように世界中で牛が礼拝されています。

それが、日本にもあるのです。京都の純福音教会に招かれた時、京都を案内していただきました。北野天満宮に来た時、「この神社は菅原道真を拝んでいるのです」と言われました。1月、2月になると、牛が連れて来られ、若者達や親に連れられた子ども達が、牛に触って、「お牛様、どうか、私が、あなたのように賢くなりますように。そして受験に成功しますように」と拝むのだそうです。「日本人は、牛が賢いと思ってるんですか。」と韓国人の先生に聞かれました。「いやあ、恐らくその人達は、知能の低い人達ではないですか」と答えると、「そんなことはありませんよ。彼らは、京都大学とか、東大受験を目指しているんですから」そういう人達が、牛のように賢くなりたいと言って、拝んでいるわけです。

少し考えれば、おかしいと思うはずですが。「牛のように賢くなる」とは、どういう意味だろうか。「自分では知者であると言いながら、愚かな者」となってしまいましたね。しかし、そこは京都において非常にポピュラーな礼拝だというのです。

日本人は、何でも神にしてしまうところがあります。イチロー選手がメジャーリーグで活躍しています。テレビを見ていると、観客席に大きなプラカードを持っている人がいて、「一郎は神だ」と書いてあるのです。メジャーリーグの選手にはクリスチャンが多くて、彼らはホームランやヒットを打つと、天に向けて指を指して、「これは、神様、あなたのおかげです。感謝します。栄光をあなたにお返しします」というジェ

スチャーをします。観客席にいる人達に、「自分は神を信じてプレイしているのだと」あかししているのです。

そういう文化の中で、「イチローは神だ」というのは、本当に恥ずかしい。イチローが「一流である」とか、「世界一だ」と言うのは構わないけれど、「イチローは神だ」と言ったら、アメリカ人はおかしいと思うでしょう。しかし、日本人達は、そういうことができってしまう精神構造を持っているようです。

それでは、なぜ、人間は偶像が好きで、偶像礼拝が世界にはびこっているのか。第一に、自分の好みに合った偶像を選ぶことができるからです。自分でチョイスできる。蛇がいいな、お狐さまがいい、お狸さまがいい。鳥がいい、牛がいいと、自分で選ぶことができます。

第二に、これらの偶像は、皆人間の手の技です。芸術というのは、もともと自然世界を描くためにあったのではなく、偶像をつくるためにあったのです。ですから、最高のアーティストが、自分の最高の能力をかけてつくるのが偶像なのです。8年前、日本とパリでアートの交換をしました。日本の芸術作品がルーブル博物館に行って展示され、ルーブル博物館からアートが送られて来て日本で展示される。ドラクロワのフランス革命の絵を筆頭として、何枚かの絵が送られて来たのですが、日本の方から何を送ったかという、興福寺という寺にある阿修羅像です。インド由来の女神が、何本もの手を持って踊っている偶像です。結局、日本が送るものは偶像なのだとがっかりしました。日本が持っている最高の芸術作品は、偶像なのか。それが日本の代表的な芸術作品としてパリに行った。よくできた。最高傑作だと言って。

では、偶像をもって神様をほめたたえるのかということ、そうではなく、自分の手の技に自己満足するだけです。これは自分が作った、自分の技術だ、これは神をつくった手だ、なんとすばらしい手だろうと、自分をあがめるわけです。

第三に、偶像は決して「ノー」と言いません。不道德な、みだらなことをしても、ノーとは言わないのです。ですから、ギリシヤ、ローマで「神々を拝む」というのは、神殿に行って、男が神殿男娼と交わったり、父親が息子を連れて、初めての性的経験をさせる。礼拝と言いながら、みだらなことをすることです。それらの神は、そういう不道德に対して、決して「ノー」と言いません。人は、「ノー」と言う神様を選ばないからです。

第四に、偶像は非常に都合がよい。「邪魔だから、どうかそうか」「そうね、押し入れにしまっておきましょう」「古くなったから、新しいのに替えて、壊しましょうか」「部屋が狭くなったから、大きい神様は捨てて、小さいのにしましょう」。人間の都合がいいように選べて、便利だから、私達は偶像が好きだ。こうして、なかなか偶像礼拝はやみません。

5. 性的混乱が生じていること

異邦人が有罪であることの、第三の理由は、性的混乱を生じていることです。

「それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。」

今日は、世界中で、性的な混乱が起こっています。性というのは、結婚した者同士が、お互いの人格を大切に、成長を大切に、共同生活を大切にして、一生涯互いに愛し合うという誓いのもとで許されるものであり、その時に、性の喜び、交わりを楽しむことができます。しかし、性的な快楽を、一晩だけ楽しむことができればよいと言って、男が女を自分の道具とし、或は男を自分の道具としてしまっているのです。相手は人間というより、自分のからだを喜ばせ、自分の欲求を満たすための道具にすぎない。人間を快楽の道具として使っている。

それだけではなく、パウロの当時は、同性愛というものが盛んであったことがわかります。コリントにおいては、「神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、同じよう

に、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。」と書いてあるようになってしまっていた。

ギリシヤの哲学者達はほとんどが同性愛者でした。ソクラテス、プラトン、アリストテレス。自分の弟子と性的なことをする。当時は女と交わるのはレベルの低い愛であり、高尚な愛というのは、男同士の性的な交わりであると考えられたのです。自分は同性愛者だと公に発表できた時代でした。有名なケースはアリストテレスとアレキサンダー。アリストテレスはアレキサンダー大王の家庭教師でした。アリストテレスがギリシヤの学問、文化をアレキサンダーに教えていたのですが、彼らが同性愛関係にあったのは衆知の事なのです。当時、女性は子供を産んで、家に引っ込んでいなさいという存在だったのです。夫はほとんど家に帰って来ません。女性に対する性的な必要が募った時だけ、家に帰って来て、また出ていくという時代でしたから、女性は寂しい。ですから、どうしても、友達は女性同士になり、レズビアン関係が成立していったのです。そのように性的な混乱が起こった。

6. 神を知ろうとしたがらないから。

異邦人が有罪である第四の理由は、彼らが神を知ろうとしたがらないからです。

28 節に、「また、彼らが神を知ろうとしたがらないので」と書いてあり、コリントの人達は神を知ろうとしたがらないという指摘ですが、日本人も同じです。よく、日本人は「私は無心論者です」と言いますが、そういう人は無心論者という資格もありません。無神論者というのは、神様に関心を持ち、神について研究する人です。科学的にか、天文学的にか、物理学的にか、心理学的にか、文学的にか、社会学的にか、ともかく神様に対して調査をし、研究し、その上で「神はいない」と結論を出したのが無心論者です。ですから、無神論というのは学問です。そして、無心論者は熱いのです。熱弁を振るって、「神はいない」と証明しようとする人達です。神がいらないということに対して熱いのが、無心論者なのです。

しかし、日本人は、神に関心がなく、知ろうとしないだけです。日本人は神様を遠ざけ、神を無視し、神に対して冷たいのです。「もういいよ」と言って神を知ろうとしない。

7. 様々な罪を犯しているから。

異邦人が罪人である第五の理由は、彼らがさまざまな罪を犯しているからです。

彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。

有罪だ。だから、死罪に当たるだろうと、この検事は死刑を求めています。人は罪を犯したために、死刑に値するのだというのが検事パウロの論法です。

8. 生きるための信仰

しかし、このようにして異邦人の罪を指差し、さばき、異邦人は有罪であり、死に値するという論議をしたパウロですが、そのはじめに解決の道がありました。それは福音だといったのです。彼は、「福音は信じるすべての者を救う神の力だ」と言って、福音を語りました。「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて」と書いてあります。ここで言う神様の義とは、神様の諸々の徳。神様のもろもろの善。そういうものを、ここでは神の義と呼んでいると思います。神の義というのは、神の愛も、神の慈愛も、神のあわれみも、神の永遠性も、神が全知全能であることも、全部含めて、神様の諸々の徳、神様の満ち溢れているもののことですが、神に満ち溢れる神様の徳、それが義であれ、永遠であれ、全知全能であれ、愛であれ、慈愛であれ、

あわれみであれ、全部が福音のうちにあらわされる。ですから、福音を信じるなら、神様の良さを知る事ができると言っているのです。

そして、その義は信仰に始まり、信仰に進ませると書いてあります。

日本人のクリスチャン、また世界中のプロテスタントのクリスチャンは、信じれば救われることを知っています。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。」何のいさおしもない者が、信じる事によって義とされる。私達が救われたのは十字架の血による贖いのゆえなのです。何の善行もなく、神のために、教会のために何もした事がなくても、信じるだけで救われるのです。そして、そのことを私達はよく知っています。

それでも、私達は洗礼を受けてクリスチャンになったその瞬間に、見事に信仰を捨ててしまいます。信仰を持つ前に、私達は勤勉に、努力して、頑張って生きてきました。「頑張って勉強するのよ」「ハ～イ」と、小学校、中学校を通して、「頑張りなさい。勉強しなさい」と言われて、頑張って、小学校6年間、中学校3年間、高校3年間、最短距離の人で大学4年間、足し算をすると16年間も頑張ってしまった。そして会社に入ると、上司から「頑張りなさい」と言われる。でも、上司から言われなくても自分で頑張ってしまう。頑張るということが、先祖伝来、私達の血と肉になってしましますが、日本人の特質です。だから、多くの人たちはずっと頑張って生きて来たのです。

ところが、頑張りによって救われたのではありません。信仰によって、ただ神様の愛と恵みを受けるだけで、私達はクリスチャンになった。ところが、せっかくクリスチャンになって洗礼を受けたのだから、頑張って、いい信仰者になろうと考えて、私たちは、クリスチャンになる前と同じ方法で生きようとしてしまうわけです。

聖書は「義人は信仰によって生きる」と言っていますが、皆、これを誤解して、「義人は信仰によって救われる」と書いてあると思い込んでいるのです。信仰によって救われるというのは確かに真理ですが、聖書は、「義人は信仰によって生きる」と教えているのです。救われるだけではない。生きるということを、信仰によってするのだ。努力や頑張りとは違うのだ。

では、頑張ることと、信仰によるのでは、どこに違いがあるのでしょうか。

頑張るとは、最近のことばで言えば、ポジティブシンキング（積極思考）やポッシビリティシンキング（可能性思考）、プラス思考などです。私の説教を聞いた人々が、「平野先生、やっぱりプラス思考ですよ。ポジティブシンキングで行くべきですよ」と言うのですが、私はポジティブシンキングの話をしていてではなく、信仰の話をしていてのです。

プラス思考や、ポッシビリティシンキングなどは、意志や力に頼るという人間中心的な考え方です。自分ではできない。頑張りさえすればできる。自分の力で何でもできる、というヒューマンイズムの考え方なのです。

しかし、信仰というのは、ただ神様を見上げて神様に頼る事、神様からいただいた力で行うこと、それを信仰というのです。頑張っている時、私達は神様の力を無視して、自分の力でやろうとします。自分の力でやろうとする時には、神の力は全く働きません。「神様、自分の力ではもうできません。自分の力は破滅し、破産しました。自分の力は、何の役にも立たないとわかったのです。私はあなたの力が必要です。聖霊に満たして、あなたの恵み、あなたの力で仕事をさせ、奉仕をさせ、生かさせてください」という時に、この神の力が働くのです。

私達は、頑張っているか、信仰によっているか、どちらかです。頑張っているなら信仰を無視していて、信仰によっているなら、頑張っていないのです。両方一緒ではありません。そして私達は、神が必要な力をすべて与えてくださることを信頼して、自分の力に頼らずに、神様に頼って生きるのです。

パウロは長い間、頑張る生き方をしていました。「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きついのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」とパウロはピリピに書き送っています。律法については

落ち度がない。文句あるか。俺は教会を迫害するほど、情熱的にユダヤ教を信奉した。だれよりも、熱心だったと言いました。しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。これからのクリスチャン生活には、こんなものは邪魔だと思ったのです。

今まで、パウロほど勤勉な人、頑張った人はいない。パウロほど努力した人、多くの事を達成した人はいない。しかし、実を言うとこれらの過去の業績は邪魔だ。キリストを知る知識の絶大な価値のゆえに、私は今それらを糞土のように思っていると言って、彼は切り捨てたのです。そしてパウロは、「私のうちにいますキリスト、栄光の望み。聖霊が私のうちにいます。聖霊の力によって生きる。信仰によって生きる。義人は信仰によって生きるのだ」と、毎日、信仰によって生きることを学んで行きました。

私達、クリスチャンも、恵みによって救われて、恵みによって生きるという事はどういう事か、学んでいくのです。パウロは「御霊に満たされなさい」「御霊によって歩きなさい」「御霊によって祈りなさい」「御霊によって奉仕しなさい」と言いました。聖霊の賜物で奉仕しなさい。異言、預言、異言の解き明かし、知識のことは、知恵のことは、いやし、奇跡を行う力、信仰の賜物、霊を見分ける賜物、管理も、リーダーシップも、仕える事も、あわれみの賜物、助ける賜物、これらは全部、霊的な賜物なので、奉仕をする時に、自分の頑張りや奉仕するのではない。神からいただいた聖霊の賜物で奉仕するのです。何でもかんでもする必要はありません。賜物がないなら、いやしをしなくてもいい。あなたが賜物を用いて、奉仕すればよいのです。助けの賜物でもいい、奉仕の賜物でもいい、あわれみの賜物もあり、献金をする賜物というものもある。管理をする賜物もあるし、教える賜物もある。

神様から超自然的にいただいた霊の賜物で、神様にお仕えする。そこには、人間の頑張りや余地はありません。人間の頑張りや、聖霊の力をはね返すのです。頑張っていると、愚痴や、不満が出てきます。どうしてうまくいかないのか。みんな協力しないのか。私はもっと認められてもよいはずだ。

それは神様にとって迷惑です。神様は、私達に「やすめ」と言われているのです。親や、先生や、社長さんは「働け、働け」と言いますが、神様は「休みなさい。安息日を守りなさい。礼拝することは、安息することだ。神に仕えることは休むことだ」と言うのです。

私は今日、ウールのスーツを着ています。しかし、旧約聖書において、祭司と呼ばれる人は、決して毛で織ったものを着て神に仕えることは許されなかったのです。神殿に仕える者は、亜麻布を着なければいけなかった。亜麻布と言うのは、亜麻でできた、透けて見えるような薄いものです。では、その亜麻布を着て神に仕えないさいというのは、どうしてなのでしょう。汗をかいてはいけなからです。

神は汗を嫌われます。「わたしに仕える時に、お前達は汗をかいてはいけなから」と言われるのです。汗というのは、人間が罪を犯した時に、一番最初に現われた兆候です。アダムに罪を宣言しながら、「あなたは、顔に汗を流して糧を得るだろう」と神は言いました。でも、神様は、「頑張るって奉仕してはいけなからよ。汗をかきながら奉仕するのではないよ。いつも私の平安があり、安心があり、恵みの中にいて、平安のうちに奉仕するのだよ」とおっしゃっています。

では、「平野先生は、できるんですか」と言われると、正直言って、そんなに上手にはできていません。それを一応、目指しているところです。今から少しずつ練習すれば、30年後には完ぺきになるかもしれません。神様は「私の恵みの中に安息しなさい」と言います。安息すると、パワーがやってくる。すると、動きたくなくなってしまいます。頑張らなくても、体が独りで、動きたい、やりたい。そうしたら、楽ですね。

頑張りというのは、もうエネルギーがないのに、無理やりエネルギーを絞り出してやるから、頑張りというのです。エネルギーが溢れている人は、頑張る必要がありません。何でも楽にできますよね。そういうふうにして、わたしに仕えよ、と主は言われるのです。

今まで、頑張りによって生きた私達ですが、これからは信仰によって生きるライフスタイルを研究し、身につけていきましょう。

お祈りします。

愛する天のお父様、このように、あなたの救いの計画は完全です。恵みによって救ってくださっただけでなく、私達は恵みによって生きる事ができる。恵みによってというと、私達としては力が入らないので、これでいいのかと不安になってしまいます。落ち着かないのです。安心なさい、働かなくてもいいと言われると、私達は非常に困るのですが、しかし、自分の力ではなく、神様の恵みの力によって神様にお仕えすることを、少しずつ学ぶことができるようにしてください。イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン